兼久兵乱記

上

野基卓
本明清

考文保之物語

一見杉杉原者、九條殿家司
杉原宗房字平蔵也
因縁ヲ以平蔵杉原ヲ目当ニ
本書、杉原ヲ保之物語と同一筆
者の字也　元和頃字歟

方々へ宣ラルヽ下ラル事
二位殿ヘくどくどくごと并ひきわたの事

盛岡

承久兵乱記上目録

後鳥羽院の事
相家実朝薨逝 并 薨去の事
義時追討の評定の事
光季親廣とのさ行の事
官兵光季をせめの事
公継公卿ぬけの事
方々へ宣旨を下さるる事
二位殿くどくのこと 并 ひきわけの事

盛家

義時宣旨にそむき天子をなやまし奉る事
京都方へ身方つけの事
高重うち志にの事
尾張国にて官軍かつせんの事
秀康胤義おちらるゝ事
阿曽沼小次郎まかりとゞまる事

承久兵乱記三冊（落丁アリ）
不忍文庫旧蔵本ニテ阿波国文庫本
依源某ニ嘱シテ上矢氏蔵本、江戸駿河台
本文ヲ西氏文庫所収本ト殆ト一致ス
（下総）鼇頭本
右之承久記上下弐冊依
所望染筆也
権大納言信房（花押）

奥書
沙汰ある文を書とせしく
異本あり本文の本文
よし、
けれとも此家蔵本
杉本ニ伝之手沢物
と同一筆者なる如し
老来の筆杉本印し
関連ある也
三千円し
手公五、十七、宝暦良一識

…院とまうすは正三位按察の信隆卿のむすめ
なり治承四年かのえね七月十四日に御たん
じやう寿永二年みづのとう八月廿日御年
四さいにて関白はかうしやうのせうかいふるて

義時宣旨ヲ下サレ事ヲ
京都方々ヘ分ケタルの事
高重うち死ル事
尾張出ル　官軍ヲせんの事
秀康　胤義ヲうつる事
ウ雷法小次郎まうどとる事

承久兵乱記上

後鳥羽院ヲ出ス事

皇八十二代の帝ましまさしおはしける後鳥羽院とぞまうす
顕徳院とぞまうしたてまつる　孔子ヲ崇ル後
高倉院とまうしまうしたり　帝いまだ三歳ニ成ル　高倉院
ヲ　平の朝臣　藤原の朝臣の孫ヲ帝母ト　七条
院とまうす　正三位　藤原の信隆卿の女也
ウリ　治承四年ニ生レ給ヒ　七月十四日ニ内裏
しゃう　寿永二年ニ　三位のとの　八月廿四日　四年
ヲ　平の朝臣　ウかうのせうちいふもて

1150471

所せんとあり元暦元年さの元めつ七月廿八日
ゆうしゅさいて太政官庁にてくわあり所
左信十郎年うおいてきぶいのうこそとまるのしおりに
建久九年はちれえんしま正月十一日四くう井で
おりさせはくず井一れみこゆりの山去所
門院こしりそれしりこのくうやしきうへ人
民こはしてこそいやしき下女さちしつ宇
させはくしはしもちりしまきんこせいこれうち
とをれまるひりりしゆこはくこきはこもの
ゆりはうでやとぶいつこはくこれ武

青ようどうこそ弱わりしこい玉こりとてみ寿り
今り白ひ院乃所宇さくりんとつしこもとて
ウさせはくこさてひと玉脇ちりはけこを始れ
しこうこまこ世四所りさいりんとふこと
じ先こはこやしこさいまんこ所まえこ
けんこ弓こわまりしはちこつてふこんゆし
十人まいこせよとくりんこうこわいせこしこひ
ちりちくこれ六郎左はこうこれ沢三郎一りは
まけ次郎左こはこはくここはこりこ武士
六人こまいこりこりこはこ上ぐこまいこせよと

なるべきかせんせんとうべしとて、さてはこの大郎
いねとしけれ小太郎い為ともうしてこの二人をぞ
ちりぬるとぞ、さてはこれとしひさうして、所をもと
うかねとこれ小太郎とまつてをりてて十三
年と申す、兼元四年うれえしま十一月廿又
日さ一ぬみこ沢くるぬとおぼしてまつり、中二
ぬみこ沢くるぬ、中はけくてまつりをりて順徳
院こしりたうぶく沢てうのひふくく
ありてのち十一年と申す、永久三年四月廿
日位と、中一ぬみこ懐成寺ゆ沢りぬ、新院と

まうしぬこれとい中院ちくみうとい一院とぬ
ゆ沢こしふくく一院中院ゆ沢の百ゆ
くもいとそやうけり、さてはこれ百ゆ王位ま
ぬ四月ふとぬ沢して四くく、中後堀川院ま
まつりて王位ぬ沢ぬ、ぬ沢ぬ人院ぬ沢ぬ
さしゆ人ていうふとたりぬりゆ北條家てう沢
ぬ沢ゆ人とそきこと沢り上位ていい地位ぬ沢ぬこと
こりしてかくくぬ故右大将ゆりとぬ沢ぬう
平家とかうがりしりきんしやうゆ文治元年の
冬乃比日中玉ゆりそうぬいゆ中ゆなり沢ゆそ

はち建久三年七月に征夷大将軍にぬしに任
ぜられ三年ごと在京し郡郷をしたがへ
てつく天平はるかにうらうまいをあてし花
にもつく領家しちとうとて福地と領家
とう為しかりり

頼家実朝兼進

頼朝しに乃ち世に源氏平家はいと
うれわんせんどうう梅りて治承四年の秋の
しりんとおこして六年のあひだに天下をと
ると元暦二年に去夏に治り平家とかろ

りて世い元はるこるとは幸十三年世代
ぶか幸十九年より井年と中正治元年
正月十三日に八十三さいにして卒し法名うの
ちつくさ山りに頼家とはきりの母
に法二位政子たうにより平乃北ぶし
とちりりりいに名と十万家とうとを建久八
年十二月十八日法名位上に叙しれ年三日
右大将にうり法名四十六さいにり同九年
正月廿日さあさ乃権ゆに位しの正同十一月廿
八日正位下に叙しと同十三年ういぎんあつて正

治とうらと正月廿日左中将さてんをのこうす
八さいのとき廿六日ゑちごのかみに成ぶ
ぎやうとへゑちぜんぎ守に成ぬ正治二年正月
八日従四位上ゑちごのかみ同八日さゑもんのかみ
さゑ同十月廿六日従二位ゑちごのかみ左衛門督
ゑにんし侍ぬとし十九さいのとし同七月廿二
日従二位ゑちごのかみ征夷大将軍ゑにんし治
同三年七月廿七日ていしやうをうけたまはりて同
八月廿七日ゑちごの長官一万石ゑゆり侍ぬ
とし六さいのとし同九月七日ゆ家し侍ぬ同廿九

日ゑ伊豆国ゑちごせんじにうけさせ給ぬ
世成ゑりぬ事正治元年のとし建仁二年
ゑてうまてのとし同ゑ年のとし二代の将軍
として世をしろしめしたりしかとも
ゑ治しらいゑんつまりをとるさしたんだう
あをそむき給ひしゆへにゑりぬ
ちゑ元久元年七月十九日おわりぬ遠江ゑ
国ゑうたのうかわのかみ侍ひきのとし廿三さ
いのとしに御ゑうとの一万石おいまもりの
とのゆへ長尤のあとゑつぎ侍ぬ建仁二年

九月七日ゐんの十二さいにて従六位のぼる 同日
征夷大将軍ぜんじとなる 同年十月廿四
日右兵衛佐にぜんじ 十二にて侍従
ぶくわり 右兵衛督検校実朝と申す 同四年 正月
ぎんぢく元久と申す 正月廿日従六位上のぼる
同二年正月廿日正六位下に叙す 同年
九日右中将にぜんじかけ 同三年
いぎんあつて建永と申す 二月廿二日従四位
下にのぼる 同二年 いぐんあつて承元と申す
正月廿日従四位上のぼる 承元二年十二月

九日正四位下のぼる 同三年四月十日従二位に
のぼる 同月廿六日右中将にぜんじ 同年
いぎんあつて建暦と申す 正月廿三位に
のぼる 同月十八日みまさかの権守にぜんじ 建暦二
年十二月十日従二位にのぼる 同三年 いぎん
あつて建保と申す 二月廿七日正二位にのぼる
同四年六月廿日権中納言にぜんじ 十将もと随身
四人あつたのを四人にかへる 同六年正月
十三日権大納言にぜんじ 同三月六日右大将に
ぜんじ 通家にあつた 同日右馬寮の監たち人さうでん

家もち同十月九日内大臣よにんぞ左将もち同
十二月二日右大臣ゆにんしゐ左のちしこれ公房
公のあとより同七年正月十二日りいぎんあつ
て弘久へとうを正月ゑ大瀧おこなりゐへしとて
当者れとうり坊門の大納ゑ忠信でとくんこう
ゑてうしやうをべきうのおこなりゐせと
くぎやうでんぶありけりこのせちの中納ゑ光
親でやしなれし抑例と往代よたつねゑ
とよいとさ称しよがこんぶ拾遺右大将年住し
ゑつもうしやうくゑしげきやくしきれとくゑ
みんで実朝ゑいゆうようれ月くりんとうゑあり
けりをはく郷相とへんしうのさりしゑそし
て拝賀とをへしや百官で朝廷ゑこゐ主
てりこれしいまごゑの例とうしたりさし
れいうの内の拾遺い係京極為氏ましく
けりおかをれ名い光親でのいきんでうく
うのいとれありゑしゆゑもあまてで実朝ゑ
まふ内ゆゑしゐへしとゐりゐ田規とこゐ
格式ゑをけく官位ゑとうしゐゑれ祢
恵元ゑしゑしゐへしとゐりせゐりゐれと

とれくしさぎにとうど猪ひ子同正月廿七日
将軍家右大臣いがけちらはけるり巻乃八ん
ぐうへ御ちやさんうりうりのうくるまゆあり
ゆうこ兄兵衛四人はざまこ祝り四人はさり
一負 将書茨郎乃りげきり 府生伯盛光
将監中原かりうこ下ちくたいうり次ま
敷上人りの一条乃伯はうし氏 友兵衛尉
りはれ伊ちれかねさ祝まさ むまれ椎乃ま
りもち名れ ちくぐれ椎乃ちけのぐうし菊
臣次り随身 一条乃大まりうど一条少

ねうしはぎ 兵乃ゆるぐれりまもあけりのあちん
伊賀かねたりはれ祝乃りちん ちんしつうぐ七仲
章名りちり 次り花駒 友勾高りりたり
平勾高り犯きり ちれ乃すかぐれりまもち犯
右近大まとちり 乃くまれ椎のまはれ祝うど
くうどれ大まもちくに むまあちけゆさう
義人大まくにど 右近大まり犯ひろ さまの
りうきれりまちりまこ ちれのむうれりまりうど
ぐうきれりまけふさ 義人大まちげはる むりの
椎乃ちけのりうり ひりの椎乃ちけむ祝ゆも

ひさしゆきちうひろ　三番りゝ権大夫　しらゝ郎
うきやうの権大夫　はりあそん　次ゝ官
人　秦ゝ新ゝ新　高長下七郎　敦秀　次ゝ
中車　おのさ車別　一人　牛童一人　次ゝ
清兵二行　小笠原次郎兵衛尉　ながさよこざく
とゝ　ゝ　ひとちやくと　武田太郎ゝ
く　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　伊豆左衛
門尉　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
くと　土肥左衛門尉　ゝ　ゝ　ゝ
とちやくと　大内太郎　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ひとちやくと　ゝ　ゝ　大夫
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　秋田城ゝ　三浦
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　小太郎
と　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　次郎　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

さぐぶん 中臣ちかたう 下毛野あつらん 因
あつうぢ 次て公卿まい 新大納言ふぢはら
さねふさ 中ぬくにち
八条三位 ふぢはら 藤原三位しねぶ
玄車つり 次て左馬大夫 ふぢはら
ゆきむら 武蔵大掾 ひろはる いさのりこ 清重
関左馬門尉 まさはる 布施左馬門尉 ふせ
小野左馬尉 ひでつ いずれ左馬尉 ふつ
天野左馬門尉 まさうけ 武友左馬尉 むとも
伊東左馬尉 ふけ 足立左馬尉 あだち

市川左馬尉 ちかう 宇佐美左馬尉 うさみ
佐野左馬尉 ひろはる 佐野左馬尉 さの
宋左馬門尉 たうちう 中条左馬尉 ふるが
佐野左馬門尉 まさひろ 佐野左馬尉 ひでうぢ
塩屋兵衛尉 とうり 文間兵衛尉 くまうぢ
若狭兵衛尉 ふぢ 佐野兵衛尉 ひさ
東兵衛尉 ひでた 左屋兵衛尉 ふる
塙兵衛尉 ひて 狩野七郎兵衛 ぐ
筑紫 随兵一千 文寺 ふる
さんぶ 在京大夫 ふぢ

ちんぐくいれいの事ちうくう清水と仲章ねに
よりゆづりてまりうり給へ神文ちうとひくゆ
ちいだけちうこまちれいでいりうへうをあひや
つんとそび神祥ことたうりてこいつあつしを
ふ宮ゑ中下馬れたまれかりうりうをぶ
ねきうの和二百二ヘいりうきうとうをそ
みうしいたうりいでいりあいてようぐひよ
ちうとぶねうちのけかたれたうあく
とそみうしう右人ほどうりうてまりて分
一れ太力とい物うてあいうせ行へともはぶのた

ちうたきりふをうれかりてひ海もとやうちそ
おかをれそうはぶのたちうちんしやうぶ物
きうれわはきのたちうきのうきりれり
りうきびどうふりてはぶれ日ちあうり是
とうて一どうまっとつりとのうきりぐぶの
くぶやうてんしやうへいきてきわはりくりの
どいびやうおうこれうりび東西ありて南ふ
ちてうちうりうとい百千れいはちのうち
うれうちずいびやうう文中うう世うほうへ
どもちうてきとちりうりうちて戒田大郎ま

さいはてをこしらへあるべかりけれども、
きりはをひく、別当公暁ちくのうちにとうつの
うしなはれぬとて、中なかにたちまちてこの
くてんの宮ゆ下りのりんぶうよりそひ伊
うの家ゆ、ものもとりあへずそれうちそ
こりてあひうしふ家ゆ長尾新六ざえ
ものく大郎うしげより同次郎たゆ
けとあるをひとりゆうしのもしきせんぐ
やうのかりぬしにをりてびうんぐりにぬり
ちくをうちいがくを公暁しさ下りいぬたさい

さうそれを軍兵ともしをくたいさんを法
ぶうせんとうかたのしこをを公暁いうのいく
びをちて後見の僧十ばかり宮下の小若
れをゆくをみけるとかりて時をうちあつ
もをやりのいくひどかをるうちぬいとかをさし
かりをうや公暁のをまひをかりい我をつをを東
門の長をををかりをくけいをくとかををを
ミをし義村をををををををををををを義
村をくをんをはをうをりをんをいをみををつをををり
をりをうをををををのをををゆへをり義村

さいとなりて天竺のてんくらんにまれなるのあひだをくれいをうつさるごんごよいぎりかりたんぐうをくにくいうちんあくしのひと人れ無士とりつくへきしのいたんたうとかう帝ふしやどうくしてのちてごんのてしをうとを左京太夫れをくへやけうりうくてきていの出陸れくてて法ちやさうくの間柴どうちうてまつくへきうしをびせれうかたに一ぞくうとまをきあんうてひやうちやうとさいあぎりとかいぶようくへをくれたまあるれいをやをを

うちうてまつりをとをつかんふたろくへうちどうくうひきをりををを義村をうんのをとうをて長尾乃新六ををしげどうつてをさくれうるをけてをしげをでいをどをびをとをうてくくを誘いをおどしれう誘ひをうちやうを新発次郎をうて太うつをれのをうりをれをて下郎法文人をうひをう出陸のおりをうを伯中乃おをりの家をををひきをりをりおりうて出陸い

をしれうがひうむりをれをものをんをんをしれのうひをけりををのをうんのをれをのをて

義村が家につかんとし給ひけるが雪ふりけれど
しけしさらうてゆきあひ給ひけり
これは次郎とびんにてたちまち公暁とて
きてたゞひとり志なうとおもふ所へきたりける太
刀とりて公暁のくびをとりてまいれ
それより夜のしらみまで給ひけり
生年廿さいなり抑これは公暁と申は右大将
よりともきやうの御まご金吾将軍より
いへのきやうの御子なり御母は賀茂六郎
たけなかがむすめなり公胤僧正にまいりて

出家しかの貞暁僧都受法の門弟となり
こゝろやの別当悪禅師公としりうしとも申さん
なりしとぞそうりのちお家でのあらそひ
ちやうし一万殿にゆづり給ふ建仁三年
九月より小名平時政りうてをさして義
時と大しやうぐんとしてよりかけ世しかへしかれ
うちさてまつりけり此時一万殿わづかに六さいなり
外祖父比企判官よしかずもらうとうも百人
もけてふせこうたるかいへともつゝまでは
井さとのくさがいしてかりこれかまいて右

大臣家し親兄弟のもとへ兄れいこんどかう受
かんとくて立ひらりこれりこれ西まんしあり
同別当たいちんこ志やうこんかつさやうのひと
うめこれ四ゐおかしまいらこいこと世ん志西
殿ゑ上けのもとをおかせ三年九月廿
ようちこてまつりかりおれしさいこよ世んを
うこくおりしこりこいおし世んさい家と中しう
永久二年四月十一日これ乃つりこ之そのの
しみれしまりいこよ竹の四ことてゐし
ちりおりまいは見いこりに祈しやうぐんのさ

いこ乃ようり祈ふとりやうかたにこぐけりの事
くひをちこくりこりしこいをみいちうしゐ右
京大夫ゐ四でいしちぐさんせこ祈てい志ゐいで
ありひてうの四くびを月こ祈安東次郎しぐ
いへ志ゐこをこ武ア天捕ゆこれ乃ゐと
まこしこいまこ乃こりのおりてを乃こてまつこ祈
し祈ゐくびこをこひりとそゆこれこりの抑
こ乃ゐ猪事り祈こ吳事を志りをこと一す
あこをいこゆの事おこりれごこをこびてきき
れ天せんの天ゐ入道れまへりさんをゆこりこ

されしせいぶんはちいましぬのたりてよううり
へりとくさるしをるつりかよ今月ちづつきんしこて
まつりはなくらくはいきんじやうしこれにて
しにあらずりのうり車をとりてあさいおりの舎
り文公氏のぐしとありのなさきつけのびんの
まくこ一とちがねりを給てりつましとせらしてなまめ
つまねはさよ夜のしりの紙の説んしてきんされ
わりと忘つし給
やてはかんねしみきやしくのりねとを私との
梅よ春でこくとりか南門と御いおの御まいきうめ

また車よりおり給へきさまいゆうせんとつき
ありぬけのとりや同本八月のごい和かさりしと
おろさ世の人の戒郎はしやうごんそうのせや
行第ありて又むさしはちちりひろ丸来り大史
ときひろきそのすりがのうまとなし秋笛
撫をけちりかきれりまゆう兵むしり太史財
しけりせこ下の家人へ一百よ人こうこその
あいしやうよたへしてしか家ともけ侍なり
こねのくよ平家と勝寺寺院のくさらう
まなうしたてまつりさんねり秋ゆくひのあり

本ところありしかはあさいつふくさぬもゝくりかへ
きにありてきゝに忠氏にたまりかゆくしとゝまつ
てゆくびにもちゐ井くりんにつれてそまつりか
こてもこの世中はいたんへきよりの道とよや
みの秋さいかりひとうしまつかすりしも昭世
かきらつ夜よは詠てうしよへきしとれ申
けりさうりからるくさやう夜上人へいしりくりん
そのかりものひけりすかりれ世かう洗かりう
して梅原乃てしいまつゆきさけりともたりん
ゆかしき實氏也

表れたり人々は口をしきぬれきぬをきたまひたてまつり道にいは
みきてしをゆけり同年二月八日右京大夫（うきやうのたいふ）ましよ
しゆつ太らの座くしたるまきてで婦ひさるは
まいらひのはけみきらひてさうくれるやさんかり
月廿七日はわのしたかぶらのさかゆかみかりをし
をまうろさいねめしこりつるにあみそれおち心神（しんじん）
みうらん世しあひてさのきさんてみよ明の顆はよ
ゆはりていがれ四郎はりてあひぐしていま忠
し行ぬ志りかる右京太夫ゆうくれもやくたかの
うしさんしり給ふ西知のおいてさうの役人

とまりつきまりけりくひどうり法ひあうの所
成神だうのうちをざしたまをひとりの
さてえ出焼いこんどれくてさてのをにあをを
さ天三年うる四月十五日のひつあの時を
母のをとこ二人しつゆうし法つをさをあの
てうをくをりをくして云ひくゆうえ
をつ人みをりいよをを人の三をさうり
といふひありをれ四ちをい宮さいをてをあ
ひしと祖母きを二位殿のをごくを法ひをを
天の殿御たうりいをし法ひをりをや同年

二月十六日ひをりのをこを二位殿の四ちやう
あいのうちへを宮ひいり事ありをりの
取をなるを日をさ御のをくをとありれを
ひをやくまりてをていくを阿野次郎をを
ぶやうりたうをんあか十一月りたせいといをを
けしてぶやうくりくをぶんをかまふれを
をち世をんしをたをりて東をくをれいを
ぶんのうちひくをしをををりを光い板右
大将家れいかををを四野せをんし金成の二男
をり母いを法たうをのりを平れ所まをうをを

ゆうり同十九日二位殿はおかせおはしまして所
令隆兵衆討ゆきちかの下の家人ホとりが
はまへこしはらいをつけくくんだやちうつをく
ゆうゆうり同廿三日をかりはくにしりひきや
くきんちゆうしてつけくくんじやふせきくて
ふとのへとをぶせいおれとうるいをしてだりへ
をかはしとをトをかくてこうごくいぶいす
りをかりさてをしやうぐんのこうぐんたふそ
はりんとをうをかりひはつて二位殿のはを
しくくうをやうぐはれたをトをりへこう

はれ三ぶん頼經ていとをしてをしはひ源家はをの
こうしとはがせはひをりこれをくうつて二位殿の
代をしてをしはひ天下のをうをんをりをと
邪ぶい源三位入道のひまごひまの樣のみ
頼家をしてだりはれ者ごうをりをりをこれを
源氏をりうへりをうをう末系をりしかりり
してをいりんはをりとををりををりををせうつを
みをとうをせうはりをり同三をくをりをしてけ
うはりをりををひんをはりをちいちんをうを
ひをうけてをうはしてをりうんをいでんりを

とこころの内(うちとこころ)おもいうるおぼえんとおかれば

[illegible]いたうひやうちやうの事

かよそのんいうにもしてくうんどうとかろかさん

とうこおかし先しそり京ろうんべとあつ先

こ世話ひてぎしちやうとうとうこうへとて地と

たりりそれいさるみきてさにそぐろしとゆふそのの

もるれときしちやうとうくうとそ口海

これいうこうにくびどうつといろんしれひく

きりり神んうと仙人(せんにん)とにきろれとうそ

ふうえいうりうれうへおんとうくれいるうり世

てうしゆと志世そしゆふ三条三川よ立寺

うてさいせうゆ天とうちとおつけて世天とうと

うんちし志やうしに志いうと志いきろ海さ神

ともうこれ新ひねとここしうしてみいうすし山

寺とそれねてうぶくりかうこうやくこぶこ志

ゆとうゆへすり六条乃京とかうこうこすた

てまつうんとおりしうりうり京ねあうよ二

人(にん)せいしせちうりうへしうんそうあたまへて

九条乃石天長道家(ながいえ)れ三ろん二さいるるり世

ゆへとね平(たいら)さうあうこ世話ひとりこれいかまく

う家は四ツ子ともに二条の二位の人達うや
とりさやうの四じまり九条殿はかのまん所な
てまいまをいうのはゆりかつてさるよしみ
ゆてそうけうときこしめ久二年六月
ホ又日ニ京でうを所ひく月七月十九日用
ホうそうつきはたちまちくいりんこいく
れまゝ様いでくんをんあしやうれちかそな
うまり好へ抑右京大夫意じはりう平は
しけい上野介丞方又代の末孫小条
はとたゝきれゝ所まさうちやう二位為れ

ひとうしさ祢と之乃四とびりきんいとりし
てくにうりさあへ思うくしく志くとう
ゆとり孫くをはうに志るはく丞乃ちうん仁
林の次郎ゝりくとゝつてゆあり十四ふる
ゆ二人もちうりさんちゆはにうりてきんゆく
もゝ世を叮りて院くまれは幸のみちゝく
まりあひたてまりねやうそけんさんゝ入
たてまり志りくとゆゝれもをゆちさいゆ
しゝうゝ人さうゝかりをてゝされりよろこ
ひとうてちくりりゝりゝいりねうしゆてゝへ

きうしくうんとうのごんれものうちゆきあんる
いことをしてさうるく京家かちこうれてきを
るりじきをつてきくをいうりとくきりとりとを
をやうの百ようちやうきつ志ゆしかりんぬきと
もじしと院へそうしくれいうへしはくを
し美河きめんせんとてをさはのうけをみ
りいををへさうしゆのうり別して地ようと
をへられれい院きくをいうりとかり先
ゆきしうをはりすをとへうのに京すかり
きくをいふをひやうしかり院法仏ゆ

あをうをとしてはりくにくをはれ左といふ和を
たりりけりうの和りいくんとうの地ようつり
てとををれをはくをうちとえをさんぐるを
あひて院へうりをへゆをれをちとりい元家
をへ家うしめんせんとてごうりうしとにゆう
けふをにりれ左のちとりいれ右大将のはき
平家をてうのをんしやううして命にりへこう
をはをそたりりうの和りをりとりはりを
うれををひとりてをやをくりいたいをををと
ゆをれいゆをこのいをはをるれををたりしを

くいみたいくらいたべてもとうりくでもの者
をへ入らしかさ祈くおかせてごさしまれをも
をけくるひくくはうしの内うけ中そり一
院ひご場の内いさと絵りみそりをそからぎく
をれしりけうちひてさいもくほくたてさを
絵ひくおかせれきくを抑右大将りをを弧
かまくあくるをを本はの内はをはいは弧
しりをくををうどいをれこまちんくしをひ
をり三くををしかくいぶんの三をぶんをぐく
てねんぜんをいしいりをて抑ざれ天照太神

三八懐もこで弾ちくをりせ絵いをりへををてか
いくあかせかくせをまけりへくまいをうをへ大
絵をたぶけぶあぶをれ中絵ををんをを中れみど
れ中絵をしを祈ゆ天日祭の中絵をありくにをひの
中持りをり一業の内さいくをうをけぶ世二位
しろをり飛ゆてををしをやをちやをごん二位を下
をんちやを武士をいれをのををひでやを三浦の
平九郎ををぐんた祈し　仁科は次郎登納
作を木曽太郎をんぐんたををびををりこれ
しをれを時をををひををりをれいをん

びやうにんをうちとりたてまつりけり世つゝやうくん
じくんとの位をうばひとりたてまつりてあらせたてまつ
りしをうらみたてまつりてあまたのつはものをくしこと
とりあつめしかどもたゞつゝ天下をば大事いでをこす
者をばいかゞかはりなんとおぼしまして
一院ひでやうをもてまづ源義うをとゝのへきこ
えさせんがしかたばかりとおぼせありまして
ひでやうをもゆくえをたずねたまひさて御門
ゝんの御ちうとをもてゝ公家かうとうい
やうにけいかいをはじめたてまつりてのち
しやうこの人の子孫のこしうをもしまいらせ
ゆにとゝのへ板倉殿とぞうだいの三ぜんの
みをなのりてまつりしに此殿ゝ
はりまにはこ二代のしやうぐんとなりて
こしをもはしてまつりてはしかりてをかゝる
ようにおぼしめしあつかひてあるうちの
和殿ゝ大てい三ぜんにしりはぶをたまはり
高のあひだにて世の板倉殿の五ぜん一和
殿とゝのゝ心をもうつり相家ゝうの家の
のさたをもとり家一人まうけしてまつりしを

り宮は禅師（ぜんじ）の君はいとうつくしうあたらしきほどにて
はかりちうせられぬるなりこれは人へのうはさをはら
ちうしてはかなくてかくてのちはいかにもなりぬる
らめかうこうはかりまつりとりてやはりひでやを
はしとにうらはかりとりてやはりうらはかり
うちまもりくらしぬるをはかりはかりてかり
かりへてはいとしきをしたる祈りしかさかりやはり
来りまくらをとりてせんをんをもりはいうみ
四人ともうるひまもなくとりとをはらしてい
みとうるかりんいとしげうるへたる祈りしう先り

ていは義材（よしき）をこそはんふとくはくて一家（いえ）をびん
あいしう時うしくのいのちおりてんやをさ
をはみ田ひしりた祈りしいくせうをとり
てうしはうりまいりて世法（にりんぐ）日宮（ひのみや）をうけ
だいくうをうをひるへうをとやるいこのの
をはうをひるをさをしてやをうふうはへをを
はうていはとやをしうをうるはををををを
うへしてひてやをははへまいりてはをうは成
をうをと一院たの祈りしと小はかりをうして御まん
まをあけをせ行ひをうくうをはみ田植をうる

たゝかひうちでうさきのごうしをこうはいをんとせ
ちうたんまつのすでをさしとれかつたうて秀
康をたのませうあつミけ家ぶでとうさはを名跡の
じやうをんぐんのやぶさりのたちとしろうをぬく
三年六月十四日五京の武士こうのいけたもの
ちをと高陽院殿ようさはくをれ稽のうをうをけり
まゝとちうと一千八百しをとて去りをなは
ごも井の大将をんけをれとりさはを世のをうをもた
かけをうのく思ひ打しくをしいうし流をにちう
けうをうをひうをと先して伊賀の判官をうを志
うとへをせゆをせて三井寺をあくをうだうやう
ホとりさしうをけうの南都小願くをけくをものと
をれくをもをうをいうけうをいのまをんけを
をとおかゆをり公能もうををくたうけをん
ざんをかをうをけげをうをせんと伝陰奈をへて
けうをのくまをうをへををををけうけをけをけを
う大将をまをくまをしい二位のかをんをを長
うけたをりて五位の神をとりてをいを馬場
殿ををこうを伝をの先いのををんををををやう
せををいををくをんをうをうをうをををををを

くみしたてまつるふりをしてありいり北西園寺の
せんぢをしかりさてそくりんとうすい西園寺の
北の方をんとをしてあるのうえにいたりてまれ
つとをし志をく中納言実氏ゐたるをく先きより
ら連絡をかり

光季親廣とのさぶらひ

又た祈りとして伊賀判官うつ志少将
入道ちうひろといふけへうえうこむへきうと
おもせ合しけるたゆりゆりいちうひろ
入道いゆうやうほうしてよりいとをかされくを

しとも也ほこ一ゐ御をけりいさ連はへしうつ志
ゆ源氏をとりうへうゆりこ志うとにてゆうゆ
とほ家をとりへうちさけとをよも来りくをう
うけてどうしをしけへしうおうしりけ
ぐ先ゐ人へとかさりへくいりとやくれとをんが橋
入道とかさりへ入道うちを志うとをぶへうを井をまぶう
たう志けりをんをいうさ来へうをうおか
せ下をうあをてまりはけへんゐをけるひい
ひけりやうをいひやりうれい判官いまぐ
しへいをけりひまいをかされうをうにをぶけ

てんを乗りはしまとを乗し給へ親廣入道と
百人ばかりてこせさんを奉上くちまもりされて
いりみちをひろうしはせてをてうて犯とりうう
かまくらへはくへをりみうらへ乗へきうとおもく
たされをいゆりてせんとをとをひたてまつ
奉へきとゆくれしせいはをもつゆへきう
おうせうを刑二枚をくを君と一まいをてをう
一まいをうせをりはうへと一方は大将さのを
おりうすうおりせうをまをうはちち
みうをおをさはは判官院はをひをりおあひ

ゆをはは光季をとをはをくをかをくは代官ふ
して京都の者ごをはをんをうをををうて
はちををはは心をやをを先をうへをうををををて
をれをはるををを始をんを一をあををは奉ぐを
乗りへきををとゆをはををはををはをを又か
をを初ををををををををををををををををを
あやをを事をゆををへ大将ををりはれはは
ひをやをりへをりはをりをををををををを
ををををあやををはは毛事ををはををへを
おをはををりをを走りををへはは所へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

官兵光秀と世せい平

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十善帝王とゆうてきさきさうけさせ行ゝり秀あ
うちさ京とまさしおすしゝくみのおりす
ゝどゝと世のびたいさうゝゝゝゝ又いうさ乃國ゝゝ世
こえ和すわさしおちごゝとふすつきてゝれ
ゝりかさくゝゝたくゝ世行ゝとくゝくゝりせん
ぎゝと光秀いひすかい東ゝもおゝもおゝゝれ
とゝゝゝそゝんごうゝおかゝれ光秀とゝの
て代官ゝて京乃天西ごゝりとゝれ
ものかゝ犯そゝゝ犯ゝゝゝゝ天犯と西にゝり
ゝとゝゝゝ十善ゝていゝゝとゝゝゝゝゝけて

けり。おとうとの花乃松ゆうつるもけうたん
がくにあらどやいとの宰とを奏れつた
みまし井ふるちくとうりてこうかしこく
いをとられん幸ちくちおりそれうは
人りさうれんも。ぬしうたうどをいん
おをつとそうれしうつをこ一あをひを
まちるちんしおりん人くいさくく歌へ
うこをへうをといひそれしこりそい
ありたれどを家をけそれいけうりをくれく
おちまをりおりひをりうこをまりしらうど

りいふ弁うれをう三郎けをみのを郎いひちの
二郎天をれをたん一ゐをれ次郎うちの太
郎ふぶの次郎そのをれ次郎いあをりの太
郎こんとう丸。上は七人なりをのくぶ
ふしれとうれるのをたををうころのを
ふみたうざれちうどんを人らいのをもは
をれいうぶ孫を丸をのけちうをうをへうく
ゆくまりをり判友れみにゐ四とうくんぶや光
綱ちくく十ゐさいうるのをのありをり判友ちん
ぶいありうをもいくををつを光人をあうをかま

くくへてごりうちをあらかてみやもみたてまも
まおさはしうんかどいちだはあ和のもとうてを
たてといひくれしたはとうはけちかいゆくやうか
えのくみとりておやのうしろくとみをてく
みくはをうてしいえちだはみをおやとみをてく
ふうものとやうくしはべきやうぐはとを仕
しといひくれしたはとうはあはのをを既
ふとうひくれしもうまはしうまれをこゆこう
うやうふくあくせうこうををしまうふくく
ちうしさせうまへうまとふうこちやうをやと

はをつくへていはうをあうこうしどを
りうせ我ををうさうをりしれちけかのを
りしうは日はひさうしをりはををはをん
しをうをせてへしをり四十八月七日はは
上京をせうまいでうをりををはうをは
ふをりありてせうまうをいあうをこれへひ
ま皮兵乃丞ひまてけうをりををは
をうすでを院をりをしはをいをうををやう
くををいい三浦は平九郎ををぐんたはをし
お猶へ這ちりひろ作末やをり物のを度

紀伊太郎りんくりん言重すりぶれたまりんくりん
これいへちくごのせんじゅうりのぶちくごの太郎左
衛門ありあり勅合八百ちきうてすうせてすう
たちゆうちゆいとこしえさいげてさいごの三百え
ひしておミめてりふ井えてゆ三郎ドクりい京
ごくりてゆ大門どもたりけげりてゆ小門
どもこもにひうきて西方でふせいてさいこの合
戦して人をみをりんとドクりいふ井えの
りこんドクりいえてつゆえんをひくくりて大
せいこみりてふせいをもりてきへくさりて

大門でどうしうてりたちりんりりでひきて
いんくきでこりくりゆくはくはこおぶいて
せんとドせいはざよりりんくきく京こくな
てといきうきめたりけげりてりりでひくき
こりけくものこもやこ犯どそりへて立りびさ
て一義しい平九郎判友りぶれものもこみす
つくくきふどけくりこるけくあゆ位人へこたゆ
ふくる京巡へしけりんくすくくりりゆ光春り
らくきうこうけやの決郎こひざどりれての
きにりりてしゆの決郎こせこもこみ井えて

此罪ありいまとうまくひかしてさぐる所に
乃添せい太郎小井元さの三郎さもるてこいさを
てはくりかたり井此者共太郎てしりて
つを問ちりるくやう馬のとりてはくうぐ
どしばしてえむのさいまてちりたりけりたり
そいあらはくひくかりさいりんのたてをき
此者つ財を伊三ままこれて三りをきりる
をうのをりてをせくたくりくしうちりかを
はくをりたりたる此者ちいをこうをさいり
をふせさりはちりんていてりえを入りて

うちやふれをもぐしりの判友こしてこうてか
たきりやふてはくいみぐはし問ちりあをよと
いひるれい三ぬの決郎入つと押ひくきあ
くくを入りへとりはくをものをも二よと
ひきをけてまつをくこちくごは者共をを
りりい三てまをれてはきりをりまは者共
決はくれしりへくり問ちり判友こしてをてひく
ろりをくをにをみあをものるをくをくをくをれ
て門めりくりりけりり馬ちりりたりとぬ
きてえんはきいまてちりくれい判友ををれ

佛教大學所藏

おいてに立いでゝ何となくしもは君とらふ也
たてまつり日本一の大事とはおもひもよらぬ
大しやうぐんとあるめりつ重は矢一つてまつらん
てらるちうりうた孫よしつゆきぬまりうちを
ほりみるひくわてわむしやにいたてうりた
孫よしはうへやうわまはらてまんなく人のまへ
らうまセうり源太郎判友たるしけし公
めりて門の内へとおひてしけへうり志ゆ
まうくりんじやえがしぬやまておりとれは公を
れへてかへしも矢一まいらせんとくるまち

御はたらきけるはむしけの袖さらりとセられいたり
さりけれはひとりくんをみとの山にはセうさうの平
四郎いうほうり門ておさまり内よりたのもしけに
弁えてされ三郎大事のにわつてもしとまの
志ぶ乃四郎も志ずいしぬむ孫よしのこの二人へ云
りいしまりとみてのちの去とてやうで是はいよいよ
てたいみてやれゆりうれいは余人へはおちうまり
十人へは志ずかいして判友がし平弁えてのうこん
まれ本の太郎四人へうりてかりまゝの家へとのく
まて志ずいせんとらの家よりひせんれは御同かの

たてまつりて、二人へ、けいりと丹井をれいこん
まんの太郎かり合てうちつてひとりへ、
これをかつてこの二人へとをまつがいしてうつ
おもむき丸いとこれのあるとうりかるて判官
こうたいをこうあるのこの山へうりまたるこの
いせまいこれて相のくわつぎとて刃をぬい
こうりたれとをこうとこうりえさりかりこと
次の中へへこうこうとこれくこうこうへかり
かをかしくや田ひとん二三度りてりへり
くこのりと判官こひせてひざりをへ目

をふさぎこうこうとりたこうり大はの中へこけへてらが
見と京へしこうて寄こ八まん大かこうの大香
こうへり大まこれ命こうりて志あるとり
て三とかこうこのこうこうて西こしこの面
祈んこのこうへこうこうこうり大ここびりて
志をこうこの志がへこてこさ隠きてうこりか
こうかこふた祈こうこりひろ下山再まへ
こりせんの志こいこりこ方を国をこりこ参
こうこんこ志かこのこれこここれこかこれ
かり一院こんこけんこやこうこへこしこあるを

れいたゝかうしゝ中ゝ風しゝ四てゝたゝこゝつゝをゝいゝうふ
てゝつゝをゝけゝうゝをゝこゝつゝくゝはゝうゝたゝかゝとゝの天
車ゝ代てゝうゝてゝゝをゝゝたゝれゝてゝあゝぶゝいゝよゝれゝをゝたゝや
うゝうゝはゝくゝさゝしゝてゝうゝしゝをゝたゝをゝ者ゝをゝもゝしゝて
うゝ中ゝうゝうゝをゝをゝつゝわゝせゝをゝつゝ一院（いん）の御（おん）わゝやゝう
うゝ中ゝうゝたゝかゝうゝはゝいゝちゝをゝをゝつゝをゝこゝの事（こと）あゝり
ゝかゝとゝうゝをゝんゝさゝをゝぶゝてゝうゝて御（ご）とゝりゝてゝのゝう
ゝはゝうゝたゝのゝかゝうゝをゝくゝさゝをゝこゝうゝせゝ行（ぎょう）ひゝたゝ
ゝを者（たふと）ゝうゝをゝこゝうゝはゝたゝをゝ者（たふと）ゝをゝてゝゝうゝは
ゝいゝくゝうゝはゝくゝさゝをゝゝ中ゝうゝかゝうゝ中ゝうゝこゝぶゝやゝう

邪者（じゃしゃ）をゝかゝうゝをゝてゝゝをゝのゝをゝうゝかゝはゝてゝゝ中ゝうゝ
ゝこゝうゝをゝぶゝゝ中ゝうゝをゝゝゝおゝあゝやゝゝはゝをゝのゝう
たゝれゝはゝたゝかゝはゝいゝはゝちゝをゝをゝつゝうゝをゝのゝ人ゝ（ゝゝ百ゝ）
ゝあゝうゝをゝつゝをゝうゝをゝてゝをゝまゝしゝて代ゝはゝれゝしゝやゝうゝぶゝんゝの
うゝ孫ゝ三月（にがつ）中ゝ旬（じゅん）乃ゝ六ゝうゝ二ゝやゝうゝぶゝんゝゝは四
ゝまゝうゝ中ゝうゝ二ゝ代のゝあゝつゝをゝかゝうゝけゝ乃ゝまゝ乃
ゝゝぶゝんゝゝ中ゝ中ゝうゝゝゝはゝんゝうゝをゝゝうゝをゝゝうゝのゝう
ゝ千ゝまゝんゝうゝはゝんゝかゝぶゝく元久（げんきう）ゝゝをゝゝうゝけゝゝ山ゝを
ゝう中ゝ建保（けんぽう）ゝ三（みつ）月ゝとゝかゝうゝかゝうゝてゝうゝこゝをゝゝ
ゝう中ゝをゝんゝゝ伊ゝゝくゝをゝゝうゝてゝうゝひゝうゝ

木さまーされいこの人へうれさあいのうちとてんそのニ三万人いかりんちんそれしを東西よたいぐくうしみがてんぜんのうものそれへじこなんぐうとしとせいぶきーくありうれとをはすいこでいまこはをりはおかーりありせうれうり

公維公いきんの事

大将公絶うーこざいまおこれちん（ふうりかりせうしく諸つくりこぐりへあやまは法天寺の右大臣公港公ドされうりいちくめいろうへい

りうこうくりへとを後白河の法皇はは九四月朝参ちうをぜんごこうくうこくこんりものくぐんをうこけりせはひけくうしみとついこうせんをうれしいあるいさこ作りとふくこ法位寺右へひしつくせめたしまつるみしこのいくさ一所りうこやれくく者こ長をかろひはひふいまさうたれうーひ法位こうざひふりうーみとせうぶへさてれどかろわさをりつきてしみこれかろひんはきてを大臣以下細ちいこの人へこざいとおこれつまん

しく〳〵思いつゝしぬらうさせ給ふへつらうとえ
むりのあをやくやきされたり一院をふもとへやお
りのしめんぶせいとなるらうなされたかまく
らよりを降らへうけたまわりて近ホ入道座
徳大寺のに右大臣家安家とといしてけるなりと
とにやきされぬれ
方ふへせんしと下さるゝ本
光季つてとうせしれくはいうき守方へせん
しと下さるゝへしとしくやさされまれける中納
言光親うけたまわりてせんしとくうの

ねりいはく
右弁官下　五畿内諸國
應早令追討陸奥守平義時身参院
廳蒙裁断諸國庄園守護地頭等事
右大臣宣奉勅近曽稱関東之成敗乱天
下纔之政務雖帯将軍之名偏假其詞於
命恣致裁断於都鄙剰耀威如忘皇憲
論之政道可謂謀叛早下知五畿七道
諸國令追討彼義時兼又諸國庄園守
護人地頭等有可言上之旨者各参院

廳宣を上奏隨狀を抑留宰領家
等事を令支配勿致濫訴是嚴
重不遠越者諸國兼知依宣行之
承久三年五月十五日　大史小槻宿禰謹言
ことわりの東國へ乃ぬけしたしたのこ
ゝ祈り押松丸とゝ下さるこれ
のみいせうくとおりくしたり平九郎判官
たゝいしたしたつしたゝ
くとてしたり十六日の夕乃こくゝ東西
南小路七ちうしたしたけて下され

ゝりなゝ三月南都山門とゝちうして
法山の一乃ちくそうとめとくゝ
ゝしたやうしやうとゝけゝ
ゝうこゝゝ法國七道ゝりゝ
れゝりしたいたやくゝ
ゝ乃せんしたつしたゝ
ゝ乃せんごゝしてゝけゝ九日乃
したしたのこくゝ判官乃しこ
ゝにしたくゝ
したゝ

まさみかふ十八月廿日のこくに伊勢のおほんぐん
ミかたにてこれはね十六日のうのこくに西方へ
せんじを下されし人とうごくへはせむかひ下り
いそりをうこひご源のかんいてそれじやさけくしらか
りしせうちうゐはき御けりひくてうけかく
いはくくそてかてせいのりさ仏にたちてはつまえ
今はりさくくるかそ入とりんとかを伝事とせん
と田へともいまかりまくるよりせきくしとかく先
らおんてうしせうかとくひきんせうれん
しとかんぎちが地やうみりかされつかしとかさ仏

えうりとかよしとそ玉しやといううき返しのかさり
時とうけさそけりもいらかくれいよりしけいちよ
くめいふもえてかぶふゆしたみるしかかくてひうり
もはくまししたんじとましてうのみとあもた
つたはり権大夫殿のたまみゆきせうかかり
みしうし時は御よくんざんしてすさともみうり
しうの中と師しとけてさしうりさんね羽
十八日時雨うりうけてせうへ伊勢の判官
うしれね十六日のうのこくにせんしと西方へ下
さうく東山への川はりひもたくいやかまくらへ入

以ゝ上り先いた祈りうるおいせうそくにくはしく
ひき元ろ家てとまれくらしゆみていまゝてこ
とゝおりけるとうゝ来おれせんしゝもさう
ぐれものどを一ケさう三ちんようゆとうつて
まつゝせとゝそいけんん人（でゆりをとゝてば
屋ん九をようけて者ひをんさんふれさをゆ
（ちくふうり祈ひをとゝていけく祈ひ祈ひ
れをうしけくちゆくを屋ゝてゝをの
祈りゆひのちゝりりをりとうひくうり
元久ゝとけ山とか祈かさせ祈ひしゆをひ

しゝ方とゝてゝ六郎ゝくゝはき建保（けんぽう）ゝ一八
とゝてゝみゝこにまゝりはゝちうしやう一ゝあゝ
を今ゝてゝ三代しやうぐんゆゝくゝみゝてわ
うゝせ結りゝ（ゝいりゝてゝたてまつりゝ（きま
けうゝせんしゝみゝてゝりた祈りゝかゝてひ
ゝをけくまゝくはゝて茅村（ちむら）てゝこゝ祈祈
毎（そ）せゝ日本（にほん）中（ちゅう）大小（だいしょう）の三ぐんぎ屋（ぐ）のしゝて
三浦（みうら）十二天ちんの三ぐんゝりとうゝりて月日
のひゝりにゝてゝゝゆ月とまゝりけりゝ（ゝと
せいはゝとゝてゝれを迷い今ゝゝゝゝやゝくゝゝひゝて

まつ生されい三代しやうぐんよみとりてもつせ
ぬふとうをみうてまつりたてまつる
二位殿くぶぎょう并ひきで拾ひ
押松丸とたけ松かさのかさ井ゐやけりいつ
うけていてきりふちのせんし七ぱうあり
里村武田小笠原 蔦西 三浦 宇都宮ちくご
の人達いよ七人よりてゆるしぜんしよぱ井
て人ゐれぜうきゆるりゆりゆり檜大まとり
のくちひらして二位殿よさんと天ゆ小ん
まりこうて左ゐいひとりのくてゆしこ二位

殿ぱけれとぐまゆてつこを移ひてまづ
宇都宮とりさぱうけちゆ千葉介あしぐ殿
とちりさしゆの二位殿 秋田掃部かしけりとも
にて おかせられけりと一院しそちやうこんそん
ちやうこでやとた祢うしおがさんきんよけを
結ひてうし祢とうんとそ出んこうもとうさ
せられいうり高祢も世祢そうしひてきにあと
うく我身のくつかうのぱくるさ人女れりてた
きたりこいうりあと世ゐいひくるれしも祢か
と世とけゆ心とてくそのちし故殿よあ

ひとりのたてまつりしりうりちくれいまいりの由と
うらね毋れとのひとかとこのゆゑ心みのありけり
ちちくくちかりしうちけきて主とりの
人〻と三とう人行ひしりり四とと仏祈ゆまを
たてまつりしまちうやかこうと世とり
おさめ行ひしりけちい心やそうりへしと心ひと
天ひのりせんとい故反ごりつきてうそるー
ごりりてきうれとをへんとうりしに世とやや
をせしうい祈るー道とと三てひしりとを
故反ういさうられたてまつりかりひとやりて

ひしりと文小ひのりせんふをとくれて心ひとの
みしりとりけてあはうそしいさうれしてま
けりをれしとりと思ひるくきひてありと
故反ごとれうてまつり月日此新とうまを
うちして子とを此ひけきをこの人にそる
くさしにいとうひて心ひのうりりとりと心ひと
りりしに二人乃きんたちいまとおさりて
世乃まつりとをふりんうして二人のきんたち
とをごくみしに反来乃りうり此反をとうれて
此ちい世中ごうりうりあ拾もるふうて

元とへて三ゐんとして旦ひしに左大臣殿たま
いのゝぬさ祓ともりこゞ一人ゝゝゝ紙
をて三ゐんとおりせひしたもうはうはへと
うゝみしいをみをたてたりゝ紙おりひて
ミうの子にうれんまかやこれこゞひこをを
ひまりとおもひ人してをきてかたう右
大臣殿ゆりのやうんうせ給ひしゝいつゝん
弟ひうれていのちをおしうへきゐれい水の
をこりしひゝるゝやと旦ひこうゝうりとう
うれうこれとそれ梅殿の四ゐこりとそうゝ浮

方とうをあゝゝまいつせうへうけう人ゝ和と
とうれゝをまうくかうこゝやうゝとうゝとこうゝ
ゝ四まゝ少へうてこそひへまゝとにおりて
きうれゝうゝうし水まゝゝ三ゐいうまゝりてみ
せてまゝりはへしゝうゝれひがこいとゝかか
まゝうれゝりひゝとゝしをゝくなりゝ浮ん
ひまゝをゝゝくゝおゝしゝへとうゝくゝゝ三ゐん
きゐゝ梅殿ひ末ひたえゐんゝゝゝうゝて
ゝひゝゝゐゐゐ月ゝうりて世ゝてのゆりゝた
ゝひゝて三やうゝゐんとすゝへうてまゝりゝ三三年

こすぶにきたるひ御所ちうくとをかくくの
やとをうんとをかのうげうんをみんと思ひ
けるこだちまちさうくのこゝろ平ちくのうんを
うんをくとりおりたし二代しやうぐんの四
こゝろ御あとをくうせんまをあるを
連人こゝ人たまいとやしうし東国のこゝろ
東家にこゝやはりへせしこゝろちてうしての
りをとりしをし殿こゝろとたてさ
世をひこゝけちい京都のこゝやはりへもやうあと
しやうちにぐさたのこゝろをつくるを
殿のうんといはれの世にかうぐはをて
ををへさ殿はをうをんはをうを三代しやうぐん
はのこゝろといいてう京家の島はひはをうか
くへふたくいとをくやこゝろへしせんを
ををうんと思ひしまつたをこゝろてから
こゝ中をやこゝひてはをう京へしまつり行
へをくくはをまひをしを大こゝやうとをを
やはりををうをあうちのかこゝのをく
ろへこゝうこゝをはをうのたちこゝりこゝ
うりてしはをくをこゝを殿のをんをこゝを

給へ、ぬいとりせしてくらみすもちくれをこれ
うかたくれたりてゆしいとくあしくある
まいてもこゆうしまんくたりつれたりう
ひのいとこいゆつりしいかいでにくとと
せくもえきいしとどれ給ひてひとのか
ちどのみしいけうたいとくとのちひと
みうくうんのたち一こしいつまてもしこま
ひてたりうあうけくちしけくのうくたを
ゆ三やうの〳〵道作こ木の四郎兵衛田
とがさうく扱業八り国のし郎とのたこやう廿

三人うりくうされていゆくの物とたりの
いみとけちひろもく〳〵道四しやくとりて寸
郎とたまりとのくよけういりてう三代三
うんの四てんとい旦ひりとれたり〳〵きうの
う〳〵郎氏い七代さうでんれ三ちんうりみく郎
郎まれてそうの四ーみと三れまつくもくき
くあくとやがはてゆるうつくちていのちと若
にうつせーうとゆにしけてうへーと
ひてとのくらくゆいて一どうに立みり

開業合戦ひやうちやうれき

ゐけちりあひのかちまうしけのこゆく取さ
くさいがうして せんじていは在まうせんの志
ごいひやうちやうありすちのりまうしけと
なりいあしうまうこと祇どうちゆさふさうへと
とりけの権大夫義経ちうしりるん三ち
らい日平三ふ二郎ちうへありみんちうぶ
ゆかやうそうせのりうこたまあん平ときぶ
つまうて せうぶきりとへしとうりうれうこ
ちうひたちうとうとうとうく一三ぶうちんす
うほうちうより一陣いさがうのりうけやさ二陣

いしうけうやとうこ三ぶんいあうぶけさ
しのせんしう義経四ちんいすりうけちうけ
大ちんいちぶのみたけ在ゆきいの海道乃大
ねうへしう山道へい一陣とうさ在乃沢永
みがきうよ二ぶんいたけたりの大郎けちんう三
ちんい三山さ在ちんみがけうせうちんいいぶの
けれ八道うり和陸道へい三うの乃たりあ
とうとう犯大将ちんの乃人しとうとうう
れなりとのくりうりうい時ちいうまりうよりう
ちへうといいけ一日のうつれてゐ中しうりうと

うゐとのくさとさりしよ世さのりはいくや
とりさしをきいうしさこんおりきよいりてに
ぎこしけをいしに一日之はつかるとみうの
平九郎判友とさきしてうちしりしをを
くにくとうちとれんとあしりりんはかい
あく日をれいこ後つちさこの左衛門さちう
うもとにうどかしてはるる九一日之とつう
をへしこを作りうかりとちくは日はう
はこくとてこちつうとういたうはたやり
ぐんはふさやとうはうもどうししたを

はるこてこだん兵すいしはめくれ六郎せうの
判友代置見の判友代うう後拙みへ這
毛利益へ入る 竹郎へ入這うはのうやの
置けりりりりやまとの入這はづさ三そく太守
左衛門 同三郎左衛門 たうとの三郎兵衛しま
こくくとのくんしやすりれ次郎やとしし
同三郎三りしし作左次可兵衛 入太郎
おりはくこ三郎左衛門まうしげ小山れ三郎兵
つとしとうはおりぬりれ入郎しはまさ こひの
兵衛尉 ゆうされ七郎左衛門とこ三り後芳左

来つゝとゝけるゝ作こ木ゝ郎はゝ作こ右ゝ門の兵木
太郎ひでたゝ孫ちくごゝ六郎右来つゝとゝもしげ
とゝきつゝゝ六郎兵来さう海乃次郎ゝ三ま
ゝ平太郎こくぶゝ次郎右とゝゝ兵来東
兵来弁たけの次郎同平次とゝこの太郎
同次郎さゝゝ太郎三郎同小太郎同ゝ郎
同太郎入道同六郎入道同七郎入道うゝ
右来つ入乃わりさゝ兵来入道とゝ乃ちゝ太郎
おゝくちゝちよゝ下ゝ道ゝ郎久下ゝ兵来弁
こゝゝ乃兵来太郎同又郎入道同六郎

同七郎同八郎同九郎同十郎江戸七郎太
郎同八郎太郎きゝこゝゝ次郎右ゝ川乃太郎
右ゝゝゝ孫三郎てゝ右ゝの太郎右ゝの太郎
ゝいゝ乃次郎ゝゝゝゝこんあゝゝゝゝ太郎同
三郎いゝ国乃太郎同六郎ゝゝぶゝゝゝゝ
右ゝゝゝゝ民アかゝゝゝゝ小次郎同たんゝい同
源六郎あゝゝゝゝ兵来ゝゝ源ゝ太郎こゝゝの
七郎同八郎さゝゝ乃三郎みゝこゝゝゝ小次郎
じまゝゝゝ次郎ゝゝゝゝゝゝ三郎延若小次郎兵
来ゝとゝへかゝゝゝゝゝ平内兵来ゝゝゝゝゝゝゝの

ぶやう殿 強瀬のさこん殿 太郎兵衛尉 ひたち
小次郎 殿 三郎 たけの次郎 やまと 弥四郎
郎三郎 ぶんごう 伊うのさこん殿 太郎 かんまの太
郎 弥三郎 同次郎 同三郎 さくらの太郎 とうどの
かうさこん ぜんの門太郎 山田兵衛入道 同六
郎 いなげのうこんのぜうこ やまの四郎 志賀小
次郎 まのだ 川せうたが おうしゅうや川の
人々 ちくぜんの太郎 のの殿 まさか 弥三郎 十郎 て
しぶりの小四郎 志賀の小四郎 兵衛尉 同弥太郎 い
とうの太郎 同六郎 うのの三郎 太郎兵衛尉 右

ぶ 弥太郎 あけまやの小次郎 たりの大九郎
たつせの三郎 さぬのぜうきしまの太郎 志ぶ川の平
ひさうの三郎 ぶんごの兵衛尉 たくまの次郎 とうの
せい十郎 ぶんどう義時宣旨 ものの
義時宣旨 ものの
同十七日 都 ものの
ものの
ものの

ねひやうぢやうありしかどもさんちやうた称のしら
かざんぜんじまなりをましくてもかしこまらせんに
と下さしまでまおやまりみきまてらてたまはり
つるりけてらいと御びんのてらりすりくぶしらけ
せんとかこのとぬうしとかししみとはあるりいだの
ろしやうとたやてい時宗ちやうし泰時ぬくあ
ひうぐんきうしうぢよしけうた称けるおとい
しめうして十九万八百よ化とさうしたんぜ山
道より大万よ化かく源くだしより次男朝時
四万よ化よて去りは北つくものぞもよめしけう

うせうくかせんさ幾て内侍んをりれはへとらしいさせい
たてみとくらしけりこゝかん重時ませんちん
うしせ義時たねとしてらせまつりへをはりゐさ
かま臣入道ともいせうしくかきらてまぬこうしらそん
はみりたちまちふんをまてりうるゝまいたんど
う三分一れせいてさ化らしよ三分二人もかをを
こそてらせこてりけくめとみてうしやへしさてたび
らうしかくまれこうせくもひ出さは輝松ゆめの
らうちりてめかりけかりたまさ六月一日ごろ
のこくいりまかうやう院房まえしつまうりて

心ばかりのうちうち御ゝ名ゝ書をはたいうす
御松拍といゝさぬをばたしうりうしはり
くびさい行とのぐうけてまいりをりたかくくよ
いくさをかうえ方こうてうりくもくこ
とひ御ふまりふくをしていさほうは
て去ぐあのくゝけかい又月十九日辛九郎
判友のけるむしさせ川ちりさ犯ぐかくく
ゝりくしけくさ間せくくけてりへくくを
ひてうかみて去ーやといたーのりせそぐんの
はとうしさ犯ゝをれていけうる御松ゝ

光ゝくさ仕ゝるゝ紙一をゝ迷はゝさりいたう山
道かくくたうり去せいのりてのち廿七
日のあはせをひあさしはうしはくくをゝき
はしうる去せいて廿一日ゝかくくたちはび
ゝゝをくれぐせりせいとまちてうりてのり
いあまりゝ去せいうたるもうりへをゝくう
てをりせんしてのりいるゝ又日をくれてかゝ
くくをうりてはへとを御大事うたはしかとゝ
来をゝをゝをはる去せいりうゝ犯ゝまりは
いまいをやあゝをあ入はたくんりいたくも

一町ばかりを引あるきたれども和尚を見分申
はべりしかども妙心寺の門前にて見とどけて
色どうしゐしたまひねとけし給へ

京都市にて見とけ申
院と押松り申でうさとそのちんおくを
たたしくみしこんうちのものをうまく
うまどうしゐしたまひとけ申ものをうまく
も地ふちゆるしはくやくうりとうり
けてとしをとりへしかく立てごつゐ仁科次郎
みうちに大海左衛門殿ゆり糟屋左衛門殿

ありしき敵合一千ゆ犯とてゐけりて三ゆ
うさ様ゆうしてとそとそとゐいとりいたり申ただ
二ゆ犯ゆうけくとてゐしおりをを
たゆうしひろちゆ下ゆ長とをのくを
知乃しをと中へきうしかりせてきれゆ中
あを山田の二郎三げゐすゆあくゆ中きゆい
て犯のちりけゆあゆ犯ゆみくうり院く大く
と大将として敵ゆありん和まて四ゆうりゆ
うゆうちゆくゆくいみくゆ和りゆへしこの
きあくりく宮佐場多人とくゆれ人馬の

あしたにうしてたびたび和して四りせんあ
てをしようがうけさせ給ふことのくちぜん
こうかくうとうりんとうかくあるかとうぶ
じへしとして来とうあるてをかけ隠きこ
しかされしあでうるぐへうとうぶし今
いてきあふれおりへわたんうつをとさしく
ときいくかたのおとてうへん宮は殆多くと
なりて和うたのうせんも心せりしうてたり
ひんどうおまてをつうをへしとおかを下
されなどた和うしいさ行ちをひろうに

とりたびぐうりてをやうじやうをさ
をぶやきかり秀康りせんれそうぶ参
りてた和うしをりけるたびうこ下六月
三日うれうるれをこうして同四日おりり川を
つきてんてをとうう大井たのをりいせんだ
うれてりさてへいたりれ大夫これをそ
のをうれ大夫判官これのぶをこの六郎
左衛門すやりて郎左衛門ひさをこをんん
のもれをうくうのせい二千ようまれをより
へいみけくをぐいたてをきれ左衛門神尾乃

義人へ入道二千ばかりつぶしてせへいあさ日奈判官
代ゆきさだ せきけ左衛門ばかりやと一千ばかり
さぶしへい五郎次郎判官代ゆきつぐ 南四太
郎左衛門一千ばかりまもりとい太ゆうりとく
けとのうまひでやと三浦平九郎判官 山名
のうまひろつる 大和守 ばかり下ゆきのぶ
ゆうりけるの同ほ太郎判官たゆけあきれと
ゆい左衛門ゆきけ左衛門ひさつるほ二郎左
門ゆうりけ 足助次郎三ゆけゆうりさなんけと
うせうくゆうひろ一万ばかりひえ三ゆへい

長沢判官代ゆけ 太郎左衛門入道 八百ばか
りゆきけゆうりへいあさけ太郎入道うと井の
太郎入道 山田左衛門 百ばかりすけまくへい
かくゆうの判官ひでずみ 山田次郎三ゆけゆう
板倉判官ゆきとき みしうけ判官代ゆうつぐ
みいりんせうくゆうひろてうのせい三千ばか
りゆきけへしかの左衛門伊賀せんしゆうつぐ伊
賀の四郎左へゆうひろてうのせい一千ばか
りすけゆうりの東国ゆうりのうりの一方のせ
いのゆうんぜんしにさいさけゆうくめいの

ちゝけのさゆゝやうなれおしなれいこひうり
てをてうりけり院内御をあうちのみしき
よひれうんぐきうとゆひつけて中すいふ
どうゝやうう四天ゝとあうてたてまつり
うう御ゝゝ十ゝ人ゝたまりそれいえ
くゝゝそれ家ゝのゝゝゝをへうり
びうゝしくてゝくうりけり

高重うちぐゝれ事

八月廿日東西ゝりの五ねさがゝゝみちひさし
のうゝゝゝ紙たゝゝゝゝけゝもとにつゝゝ
京ゝゝ三ゝゝゝゝあ目のうゝゝゝけく井の
京大京たゝゝけゝゝのうのゝゝ東国ゝ
ゝうけゝゝこのゝゝゝゝてゝ世のゝ
天せいゝゝゝいゝゝれのゝれゆくへきゝゝく
てせんちんのせいゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けきにゝゝいゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝけゝれゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うちゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

屋しきのあるとれ行へ（ゆき）こゝ様たるこゝ所あるの
住人へうちでの部屋ゆけ所もちのせん
ゆやされしみるとれたせいの中さ京でさ
たりてもちんうちく宿（しゅく）ゆうぶんちか
へしまうけれ申事ゆ仏もしらきそしゆひひ
ゆけ相とゝいひもの人をひちとちけてたり
るけく井これといふをちすちすしの
かとにとゝ川といの川ゝにとゝのちりけり
ゝりぬていいけるうるへさゝゝ馬茶
あしやとまやてゝねるう而ゝよろひゝうう

をれをりぎゝうりるにゝ風（ふうげ）を畫（ゑがき）ゝう
うものとおりてうりてゝりゝこゝのを
けりりゝ相のをすり而ゝうちぐゝよ
せゝ山家ゝゝりけりいけゝの住人へけ
ゝやいりやれ人ゝたゝもりて大ねの作
とゝりてゝとたゝゝゆゆの住人（じゅうにん）へうちの
世部まりりりゝひれいけく井すゝ
あうちりひていまゝ立り行りし作
ゝ木をりつされせんしりけるのらゝう
ゝけく井の世部大ゆ平れたりけとゆ

をれうり天せいとて化うして京(きやう)へ来(きた)らせんと
をるうりうほうしいあんれうちうりうをうちだ
れ六郎うしゆうてとうどのうへ参(まい)りまして
こうりうれうをうしをたまうをたちうりを
とうて六十ようをこしをひうまつりけへうり
うりうの宮の位へうんじれ太郎とゆものかをと
へうれうたうをげゆうどうちうをてくさあひう
れうきうちうつうをあうりうたうしげが
うりうこう七人へうをうにうれうをうりれうう
こういかぐはううをみうう一ゆうこういうをうて天せ

いけ申ようけへうく一ようものうをうをうれうを
つをうを九人へうくび一ゆうきうをうりうけうちう
うこけうをうをうをうをうりうをうをうこれうをみて
をうぐうをうを大うのをうをげうりうをうのうは
をうんうをうりうを

尾張国(おわりのくに)にて官軍(くんぐん)と戦(たたかひ)事

六月廿日たつのうくをおりうの一ようをうのゆうり
ねうまへう宮素(くんそう)の大将(たいしやう)と犯おきやをけうと下
ケるうくひんくうんてとうをけうれうりうてき
をうてうたうりけうをうりうを天井(てんせい)をいせん

だうれ名にあつへしうまれもてい毛利
の人道ゝさとせへい毛利乃せきしの世ん し義
氏あとけのくんじやてさうへい相模の人名
まりどいあつてうりとくしさうのうミやゝ海
ちりがれせんじうしじうゝぼすがあ雲乃
せいゝせくうりていゝくうんりのせいゝうり
ゝくりゝりまゝへいけりゝはちゝ海ゝさ海乃
人道ゝとたうゝの西せいゝゝみーまうてりにア
川ごしのゝとをゝちゝりひうてしりひうりて
してゝゝきゝゝゝゝいくゝさゝせんだうれてと

まりて西ゝれや合ありへしゝしゝしけくゝふ
まゝれゝりゝ天ゝかの太郎ゝゝたの源三郎
くせれ左ゝ次郎ゝりくゝうせりをれ
ゝゝせんたうのてゝあくまりてひゝてう西さ
西りとのてゝくてたしりひゝありゝ見ゝく
大将乃ゆりゝ見ゝさうゝくけゝとゝせゝし
やりてうちちりへゝりしゝさゝはるゝゝとみてれ
ひゝさゝゝりていくゝ紙ゝりをやゝゝゝゝ生
ゝーゝをおゝへゝゝあいぼゝゝさゝくりりゝをゝく
くゝゝゝゝりてゝりくゝゝさいりせんまあ

仮さうしてんとを四つ三つまでくらいをりこれ
まへしたのまりあくこと来てきりあさいの
三郎平れうとをくこのつくやこと屋
こしはちのうんゆ一いとうしてうりてみ
れくこ十四ちくてつぶせうりやとみさやとみ
てかくこくこくひくこあさいみこうういうりの
やけこ十二ちくこくこしこけこくこいりを
見いみしこれくせこをんこくいりこにて
ゑをりたきいうんとくこくこのてまへこすり
れ次郎やとけこけこまつこんこそきれこの
やとかあくんくこをけへんたこれことやのいど
きいまりくこんかりの村の三郎このやいく
をへしとおりせくこいいうへくくりくせんたこの
てこ平の太郎よりくこものてきありこすて三
ゑ一こうりてこせけこ小笠原次郎長
ふ一八人武田太郎のぶこうこ一七人ゑこ
れ太郎りのこれ太郎二次太郎平井三
ゑのみこれ秋山太郎兄弟三人あこりは太
郎ちんぶれ太郎こうぶあきれ次郎屋ん三の
ゑ小こ平馬助戸真しこの人遣ふ世の中

けふさかれ乃四郎兄弟三人へたいは乃中三志ゆの
三郎志か川の六郎やかてれ太郎とやまなの太
郎小次又三郎にみてれ太郎ちのゝ太郎くろいの三国
形アりしきり三郎みかせれ六郎むさしの
たか海野望月やまにくるとしてせ引
しけのゝあてうる犯ひふとすておとし
これとも人へもみしひとつかりとおそあさん
とりて三ヶ一まにより合ていくさのひや
らやうち四月おか弁をいわてうんされとあく
やまむ西り武田又郎中けりかへゆるとしの

ゆつきとも同しうち敵といふて一矢まてい
のちをへきんといふしと信光か今日さむらひを
たうんとてうちとりて武田乃小太郎んと
ありせしをみたり二ぢんのてがらとうれ
とも津打汁いうてひろへきとしてせゆさ
たりけるしよせうみまへてたかゆかとよ
てをそうしひさわりてらんとかけきうしす
舟ふあそくさうしもぎとひきうりたやともくと
うちへきやうみし川きのさこんちのゝ弥六と
きしれ六郎あきめ乃四郎たいとうのへ逗これ

はかりまうけるとみてくるほのうちに武去
一人しりぬてゆくりい一番まうしたてかう
ゆとていこうよりあの侍人訴訟立まう大はまれ
大ぶしかすこうりとそうけりうぶんごよ
てうりあへと東西侍人は上のたぶ遠ちの
小六ととこへかさていい一家おれいちの小
六といい大明神ゆしたてけりたをあ
とかゆうりうたはへこうちつけうち
のかりてをつをとりてうりまとをは神
ゆうしたてまつる馬とゆうけんかさ

こつけかあより明のくはくまたいこうされ
ぶちれうさされうへうかりたけくたちとね
くれとおちあくくびとはどきしれ六郎
はくひうりうけりとあへおちあくくひを
紅ありかあとういをもはけのうふをて
ちしをやうたはとうしひのこうう
ちうけくうさををこうをていぶりを
て武田又郎とうけりうひうてまか
ちちいい四六郎ちのく又郎太郎郎まの
次郎ぶ物され次郎太郎ぶうたうして百

きかりけるに志ろくまくてこうしろかとましと
きいもしとみえけるしにおよませやさしとそれ
談つるよ女のめかしくにいふりかりいとくあう
けうの河中まひりへうり武田れ小太郎がちく信
光ちとおけでけぬひしのきしにひろく
てあふきみんとりいりの小太郎ひころのくち
みもにでしこきようしろとみをて東へたと
推すいれまけてうれてみんぢとうしれかあ
そたるそのはず中りて志ほやくたもまと
そとうにり小太郎のまさこれとすてらで

志秋やく抱もしく一むちあそて百きり
しらぬワこと私さりこそ本そもとちうのし
くほんまとすてくへてむりひのきしへざとしけあ
ぢかちく是とみて小太郎うしころみまく一
千よ三人れよ為もしくは次てかさ原の次花
あうきま小山のたまつこれとみてしちくとおを
てよせこころ是とりかうして山道のよ
五万よりきこしれりしらせと一まして一きそれろ
とうちもりすがれ太史判友これのぶちく
ごの本宮かりみがかをやの四元た本宮の久季

とうしやうしんとたいしとをもうしあ
らせつたうしてかちりけうかうはたて
まつりの太郎をもつて合戦入してうはけの
太郎さうしんかりみのくらのくんしやまん
しをこりへしていたのかたうしんかなり
わさけのかた太郎家光（いへみつ）とてものかりしき
つくをもつて合戦うしけうこれのこの
位へいこれ七郎とくんでかりうをせい
くをがこのこ二人かち合戦うしてかりち
くごかをやたしやうん二りこへうたれを

天せいりおびつさわくちくるくかちゆきなり
天はうれ太郎いたちうり命かしをみ
えさりかり天まれをかひくおちもやうを
おうけて宗郎とこしまの三郎と二人にて
てかりうとき原の六郎うりまりてうん
とうかどみて天はういひかりかり祈をみを
うをのをういうりうすして山へうせへ入てだが
いせんをとものぐいを先りまかりへかちり
てうせんのやうと結（むす）ばへ下の人へうこうり
りせうこのへうせへかりちくこれ六郎とと

がさ屋は七郎がゆんでこるをひてきこゆれ
所ばとりは菊乃ちいのたちうえとぎさうう
がどうみうとさうりかとさんこしけうちう
ばして馬乃こうどうちおこほうのひかか
ちりてきたり

秀康様義おちり御来

なすのこ雲帰こちうは三郎まめとへこ七郎
てうせんの次郎とやかれとはのこひて
やとてしかうしてくちおてきこうみうと
ちとうを西ひけのこうとうありてきつた祝と

をとこうてこうう今せんだうは多やかれあまこ
ちをおの白こいこれとこうこうれておちみんを
いこう世郎へ原太郎判官せんたうのこにひ
うひこけうへこみんとこうこえいの七郎うん
おうてこうして大百さいりあゆませうあそ
は日来こへかいはたのこをおこされせん
いかうりうひこう平判友いたのをけこいひ
てひうひうまこし来あけせんたうのこあと
へまりりおうてこうはこうとををいうくこひ
こうのまう来こまこれてこうとひう和こ

まつりてことのよしをもとめいれうぢ殿ことをも
て世をんと云りうんといひそれいなむ志ゑ
しとくおちりそれいた祈りを仕事成
一人たまくかりてしんしいよおちてゆと
かすまりとくこまにうちでおちりそり
　　のそあま
　　り菅沼まりどとをを事
同六月のあるはまりとにしをひとうぢん
どうせいの中ゝ心しりの函の侍へりそあ
まの小次郎ちりはそいてものありはりう
りれをんてやけりかいせんだうのいくさい明日
とあいぼとうれたはをやをでまりてい
りうゝ志ゝうう馬おそれうりせんだうれを陣
さひりへん事ゝをくちりかそれいひとゝ
をうちいぼ二うんゝ心うれ太郎ゝ志ゝ
うちれゝ事をとうて三千ゝ志ゝひくゝけ
とうしゝをのやゝうのうちへおりひてけ
へそれゝ志ゝものゝゝ一人をみしをざう人
ゝ事十せゝ人ゝりしをゝけりりけり

佛教大學所藏

1150471